

ドイツ語教育における 「聴く」「話す」能力の養成について

——発音教育との関連から——

柿 沼 義 孝

0. はじめに

「聴く」「話す」というコミュニケーションに大きく関わる能力の養成に際して、ドイツにおいては1880年代に、話し言葉を書き言葉や文法事項の習得、翻訳方式に優先させて、辞書は引かず、母語に翻訳することなしに目標言語のみで学習させることで、言語を模倣させて話す能力を身につけさせようという、いわゆるダイレクト・メソッド方式が取り入れられ始めた。最近の外国人力士の流暢な日本語に関してしばしば感嘆の声があげられるあの学習法である。文法訳読法が書き言葉を重視しているのに対し、ダイレクト・メソッドは話し言葉を教材とし、発音教育を十分に行う。すべてが当該の外国語で行われることから聴き取りの力が高くなるとされた。他方でこのような帰納的な外国語学習が時に非能率的な場合があることや、文法や内容理解の上で誤解が生じることがあるなどが指摘されてきた。その後オーディオ・リンガル、オーディオ・ビジュアルメソッドを経て、コミュニケーションな教授法、異文化間コミュニケーションを通じての教授法などが提唱されてくるが、理論に基づいたコミュニケーション能力の養成はさまざまな教授内容と相俟って外国語教授法のテーマとなってきた。

本稿ではコミュニケーション能力の重要な要素である「聴く」「話す」の養成について、ドイツ語教育における問題点を検証し、ドイツ語教授法上これらの技法が語彙、語句や文法の習得、ドイツ語の統語的特性の習得、ひいてはコミュニケーション能力の養成にどのような効果があるかを、発音教育の現状と英語

教育におけるヒアリング、リスニングに関する実践を参照しながら考察する。

1. 発音教育の現状

W. Viëtor (フィエトル) (1982) は文法・訳読式の外国語教育に異議を唱え、外国語教育は音声学に基づいて行われるべきであるとして、以下のように当時の外国語教育の発音教育を批判している。

「生徒に単語を正しく発音させようとするなら、必然的にそれぞれの単語がどのような音で構成されているのかを生徒に説明してやらねばならぬだろう。わが国の学校文法はどうしているだろうか。そこではそれぞれの字母の後ろにドイツ式読み方の文字や文字のグループが A (eh), B (bih) C (Bih あるいはひどいになると sih) などとカッコつきで示されている(学校文法にとっては字母に対してこうする必要があるように思われるらしい)。しかし、ドイツ語で読むということは初等学校での体験からわれわれが知っているように、印刷された文字をシュヴァーベン語、ヴェストファーレン語、シュレージエン語にそれぞれおきかえるということに他ならない。」(Viëtor: 1982 S. 23-24) (下線は筆者)

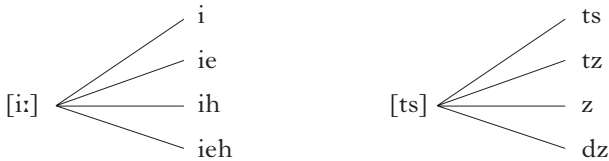
これはまさに現在日本で行われているドイツ語の発音教育にもそのまま当てはまる。「アルファベット」に始まり、母音、子音の順に発音を練習し、カタカナによる発音表記で、「ローマ字式」に読むことでドイツ語の発音は簡単だとするのが現在の大方の発音教育である。

では、ドイツ語の発音は「ローマ字式」の読み方でよいのだろうか。どれだけの語彙がローマ字読みで発音できるのか考えてみて欲しい。ich 「イチ」、er 「エル」、sie 「シエ」、Buch 「ブチ」、Name 「ナメ」、Tanz 「タンズ」、Hose 「ホセ」など、思い浮かぶドイツ語の単語を考えてみても、どれとして「ローマ字式」に呼んでドイツ語の発音になるものはない。つまり教授する側でドイツ語の発音がどのようなものであるかが理解されていないということである。ド

ドイツ語の発音には独自の規則があり、それを学習することが重要なのである。また、近年のドイツ語のテキストには CD がついていることから、発音教育が取り入れられていると考える向きがあるがこれは以下の点で誤りである。

- 1) 発音指導のプロセスを考慮していない。
- 2) 個別の発音に特化された練習となっていない。
- 3) 日本人学習者に見られる発音の特徴や誤りの特性が考慮されていない。
- 4) 吹き込み者がネイティブであっても音声学的な訓練を受けておらず、標準的な発音でないことがある。

また、音と文字の関係を考えてみても、以下のようにひとつの音に対して複数のつづりが対応するのであるから、単純に発音を模倣させるのではなく、長母音、単母音、h の発音、s の発音などを理論的に理解させる手順を経る必要がある。



Hoshii (2001: S. 39) は日本人のドイツ語発音について Junge, aber, unten などの例を挙げて、アクセントを持たない弱化母音 [ə] が完全母音 [e] になってしまうことを指摘している。これは日本語の母音性とも関わっていると考えられるが、このような日本語の特性の干渉があることに加えて、さらに「ローマ字式に」などという日本語の発音方式に似せた不正確な発音方法で指導するということがこれを助長し、正しいドイツ語の発音の習得の妨げとなっていると思われる。

これらの発音上の規則を学習者が理解した上で文字と発音との関係をはじめとする基本的な学習事項には以下の点があげられる。

1	Intonation		3.	Konsonanten	
1.1	Wortakzent		3.1	Fortis und Lenis	●
1.2	Satzakzent	●	3.2	R-Laute	●
1.3	Rhythmus		3.3	Auslautkonsonanten	
1.4	Melodie	●	3.4	H-Laute	
1.5	Pausen	●	3.5	/f-v-b/	●
2	Vokale		3.6	[ʃ]	
2.1	Länge und Kürze		3.7	Ich-Laut [ç] und Ach-Laut [x]	
2.2	Ö- und Ü-Laute	●	3.8	Konsonantenverbindungen	
2.3	O-Laute und U-Laute	●	3.9	Nasale	●
2.4	E-Laute				
2.5	Diphthonge				
2.6	Reduzierte Vokale	●			
2.7	Vokalneueinsatz				

この中で日本人のドイツ語学習者にとって特に重要であると思われるものは右側末尾に黒丸●を付した。これらの発音上の規則を学習者が理解した上で、文字と発音との関係をはじめとする基本的な事項を習得させるためには以下のようないくつかの方法があげられる。

- 歌によってリズム、音調を意識化させる
- 身振りを通じて長母音、短母音を視覚化する
- 拍子をとることで強勢のある位置を確認させる
- 鏡や紙切れなどの道具を用いて発音の違いを確認させる

2. 発音教育と聴き取り: *Synchronisierung* (繰り返し)、シャドウイング、音読の効果

Albrecht / Hirschfeld / Kakinuma (2005³) では *Phonetik* の練習を文メロディーからはじめる。発音指導における重要な要素は、まず文のメロディーや強勢がどのようになっているかを聴いて全体を把握、意識化し、規則を確認し

た上で、自分で発声し、音調を習得することが重要だからである。

練習にあたって以下の5段階の練習を取り込んでいる。

1. *sehen und hören*: 学習者はまず映像を見ながら、簡単な会話を聴く。
(テーマ、おおよその内容、会話の状況を理解する)
2. *still lesen*: 黙読。(文字と音の関係を確認)
3. *Bewusstmachung*: それぞれの語にどのような発音規則が当てはまるかを考えながら単語を分類する。(発音規則の意識化)
4. *halblaut (synchron) mitlesen*: 話されている音を聴きながらそのまま模倣し、繰り返して発音する。(イントネーションやアクセント、自然な発音の練習)
5. *laut vorlesen*: テキストを音読する。その際にパートナーと互いに発音を直しあう。(発音の矯正と語句や語法の経験的定着化)

シャドウイングは聞いた音をそのまま再生するという練習で、しばしば同時通訳の初歩的な訓練に用いられる手法である。これを行うことで自然なイントネーションやリズムを身につけることができる。同時にこれはまず音とつづりの対応関係を認識させ、それに続いて、さらに音と意味とを関連させるものである。これにより学習者は「聞く耳」を持つ以前に語彙をあらかじめ確認しておくことで聴き取りの際の補助手段ともなり語彙も増やすことができる。従って、これらの練習は話されている内容全体を把握し、大まかな理解をさせるとともに、語彙や語句の知識を増やすことができることから、発音練習をしつつ、語彙や語句、文法を平行して学ぶ機会ができるという点ではまさに総合的なドイツ語学習へとつなげることのできるものであり、「聴く」練習が発音教育とどれだけ大きく関連しているかを示している部分でもある。

「聴く」技術について、小池(1993: S. 150)は次のように述べている。

「聞き取りはいわゆる受容的な(receptive)な活動と考えられているが、むしろ能動的な創造的とも言える活動である。もちろん、聞き取ることが能動的・創造的活動であると言っても、その操作は聞こえてくる音声を分析し、意

味づけ、総合し、全体的に解釈しようとする行為の中にある。」（下線は筆者）

また、Solmecke (1992) も同様に考え、次のように、「聴く」ことが受動的な行為というよりも、むしろ能動的な行為であるとしている。

Hörverstehen kommt aber nicht schon dadurch zustande, daß Gesprochenes an das Ohr des Hörers dringt, sondern dieser muß auch die Absicht haben, es zu verstehen.

... Es sollte deutlich geworden sein, daß Hörverstehen keinesfalls, wie der immer noch gebräuchliche Begriff „passive Fertigkeit“ nahelegt, ein bloßes und eben passives Aufnehmen von Text durch den Hörer ist, sondern es verlangt von ihm ein hohes Maß an Aktivität. (Solmecke: 1992 S. 5)

（しかしながら、聴き取るという行為はそもそも話されたことが聞き手の耳に入ることによって起こるのではなく、聞き手が話された内容を理解しようという意図を持っていないと捉えなければならない。... 聴き取るということが、相変わらず通常言われているような捉え方である「受身的な技能」ということばで説明されるような、聞き手によるただ単なるテキストの受動的知覚行為ではけっしてなく、それは聞き手に高い能動性を要求するものなのだというをはっきりとしておきたい。）

一方で Albrecht / Hirschfeld / Kakinuma (2005³) はドイツ語のリズム、メロディー、アクセント、文字と発音の対応関係を意識的に捉えさせ、その特徴をいわば経験的に身につけさせようとする。この段階では語彙や語句の発音の習得から始めている。発音指導における重要な要素はまず文のメロディーや強勢がどのようになっているかを聴いて全体を把握、意識化した後に規則を確認し、自分で発声し、音調を習得することが重要であると考えられるからである。

この点ではドイツ語教材 Schritte (2004) も同様のコンセプトで構成され

ている。以下のように全7課中6課まで時間をかけて Satzmelodie と Satz-
akzent, Wortakzent に取り組ませようという強い方向性が見て取れる。

Lektion 1. Satzmelodie,

Lektion 2. Satzmelodie / Satzakzent,

Lektion 3. Satzmelodie in Fragesätzen, Vokale a, o: lang und kurz,

Lektion 4. Wortakzent: Komposita, Vokale e, i: lang und kurz,

Lektion 5. Umlaute ü, ä, ö Aussprache und Orthographie (ä-e; lange
und kurze Vokale)

Lektion 6. Satzakzent, unbetontes e

Lektion 7. Aussprache und Orthographie (sch, sp, st)

3. 3段階方式によるヒアリング

さて、「聴く」能力と「話す」能力との相互関係について現在の英語教育にお
いてはどのような試みがなされているだろうか。

千葉大学の竹蓋教授はヒアリングに関して3ラウンド制のヒアリング指導理
論(略記して「3ラウンド・システム」と呼ばれる)を提案している。聴き取り
指導の途中のラウンドで以下のようなさまざまな情報(「事前情報」、「ヒント情
報」、「参考情報」、「補助情報」、「発展情報」)(竹蓋:1997 S. 98)を与えていること
が大きな手がかりとなって、最終的に学習者に全体的な聴き取りから詳細な内
容(発話の理由、根拠、機能、目的)、さらに話者の態度や感情、意図までの聴
き取りに成功している。(竹蓋:1997 S. 115)

この考え方に従って竹蓋はこの3ラウンド制を、以下の5つの層に分けるこ
とができるという。

- ① 超短期的目標: ヒント情報や各種情報を利用してタスクの主体的な実践に
成功する
- ② 短期的目標: 各ラウンドの目標達成
第1ラウンド(全体像の大まかな理解)

第2ラウンド(表面的に言われていることの正確、詳細な理解)

第3ラウンド(言外の意味を含む、話者の意図、要旨、感情、態度等の理解)

- ③ 中期的目標: 聞き取り能力の養成、向上
- ④ 長期的目標: 4技能のコミュニケーション能力の養成、向上、完成
- ⑤ 超長期的目標: 異文化の理解、自国の文化の理解、より良い自国の文化の創造

4. Bauer の Hörverstehen の基本的流れ

Bauer (1992) は聞き取りに際して次のような注意点を挙げながら「聴く」練習をする以前の段階での注意点を挙げている。

- ・ 聞き取りの際に学習者は未知の事柄に対して不安を抱いている。
- ・ 学習者は自分で持っている既知の情報を、わからないことを理解するために利用することができることに気づいていない。
- ・ その不安を取り除くことで状況が理解でき、聴く力ができる。

これらに則って彼は日常の会話に基づいたシチュエーションを取り出し、これを以下の順序で聞き取る練習を提案している。対象とするドイツ語能力は45分授業を100時間終了した程度としている。話すスピードや文法、語彙については特に初級の学習者向けに手を加えることはしていない。(Bauer: 1992 S. 24)

以下 Bauer による聞き取り練習の各段階を紹介する。(Bauer: 1987 S. 5-10)
 第一段階: Orientierung-entspannendes Hören

聞き取りの最初はリラックスしてプロソディーや聞こえてくる物音に注意を向けながら会話全体を聴くことから始める。聞き取りは受動的行為ではなく能動的な行為であることに注意する必要がある。聞き取りは単なる言葉だけを聞き取ることではない。より重要なことは、関連する物音が何の音なのか、どのような状況が考えられるかである。(Bauer: 1992 S. 25) この後に学習者はグループでその会話にどのようなタイトルをつけるかを話し合う。そうすること

によりリラックスして聴ける雰囲気ができる。

第二段階: Globales Verstehen

2 回目に会話を聞くことで概要を聴き、質問に答える。何が聞き取れ、何がわからなかったか意見交換を行う。

第三段階: Detailverstehen

この段階で初めて、聞き取った詳細な内容を確認する。学習者が内容の質問に答えられるまで、音声は途中停止しながら何度確認してもよい。さまざまな解釈や自由な発想を促すことで教師は学習者の聞き取りの手助けをしてもよい。

この後、全員が内容を理解したところでテキストの中の言い回しなどに注意しつつ、空欄に語彙や語句を書き込んで聞き取り練習を終える。

Bauer によれば、これら一連の聞き取り練習は単なる選択式による内容聞き取りとは異なり、クラス内での学習者相互で聞き取った内容について、発言し、互いにコミュニケーションをとるという行為が相互に密接に関連しあっているという。

5. まとめ—ドイツ語能力の総合的指導へ向けて

竹蓋と Bauer の「聴き取り」の指導法においては以下の点で一致が見られる。

- 大まかな理解から始めて細部の細かい理解へと進む
- 言語外の知識を利用して、内容を推測して聞き取らせる
- 細部にわたっての理解を含めて、文法や語句、語法を理解させる
- 最終的には学習者がお互いに聞き取った内容について確認するという行為の中にその言語による擬似的なコミュニケーションが生まれる

こうして「聴く」「話す」の能力の養成に関して、発音指導と聴き取り指導の実際を考えると、「聴く」と「話す」という能力の養成は語彙、語句の習得をはじめ、さらに言語の文化的側面をも含むような総合的な言語能力の養成が関わっていて、「話す」ことの前提として「聴く」ということがいかに重要な学習テーマであるかがわかる。

最後に「聴く」「話す」能力の養成のための練習法をまとめておく。

- 電話番号を相手に伝える
- 足し算、引き算
- 自分の名前の綴りを相手に書き取らせる。
- 自己紹介
- ゲーム：
 - フルーツバスケット
 - 文字あて(単語を虫食い状態にしてアルファベットを入れながら単語を推測する)
 - なぞなぞ(職業、動物、食べ物...)
 - Stille Post (伝言ゲーム)
 - 数字のビンゴ
- 天気予報を聴き、他の人に伝える
- ニュースを聴き、他の人に伝える
- シャドウイング(ラウドスピーカー)
- ビデオの吹き替え
- 留守番電話のメッセージ作成
- 寸劇(テーマ、場面に応じた会話)(驚き、怒り、悲しみ、喜びなどを表現)
- 雑音入りの会話を聴く

以上の練習やゲームなどは、聞いた内容を練習の相手やグループの中で互いに伝え合うことで内容の確認だけでなく、発音の練習にもなる。また、以上の練習に加えることで更なる発音指導や内容の理解につながるものとして次の二つを付け加えておく。

1) 音読の効果

- 音読の時に頭の中で文の意味を確かめながら考える
- 発音
- リズム

- ・ 不変化詞 (aber, doch, ja, mal, schon . . .)
- ・ 感情表現、プロソディー

2) ディクテーションの効果

- ・ Laut-Buchstaben-Beziehung の確認
- ・ 語彙、文法、語法の再認識・確認
- ・ 空欄埋め → 内容把握 → 全文書き取り

参考文献

- 飯野至誠(著) / 清水貞助(改訂) (1985) 『英語の教育——変遷と実践——』大修館書店
 金谷 憲 / 谷口幸夫(編) (1999) 『リスニングの指導』(第3刷)研究社出版
 小池生夫(編) (1993) 『英語のヒアリングとその指導』大修館書店
 杉浦正利 / 竹内彰子 / 馬場今日子 (2002) 「リスニング能力養成のための自律学習: ディクテーションの効果」名古屋大学言語文化部『言語文化論集』23(2), 105-121.
 竹蓋幸生 (1997) 『英語教育の科学——コミュニケーション能力の養成を目指して』アルク
 W. フィエトル (1982) 『言語教育の転換』大野敏夫 / 田中正道(訳) 溪水社
 W. M. リバース / M. S. テンパリー (1985) 『英語教育実践ガイドブック(下)』天満美智子(訳) オックスフォード大学出版局
 Albrecht, I. / Hirschfeld, U. / Kakinuma, Y. (2005³): Deutsche Phonetik für Japanische Studenten. Institut für Fremdsprachendidaktik an der Dokkyo Universität. Soka
 Bauer, Hans Ludwig et al. (1984): Atmosphärische Hörscenen für Anfänger. Inter Naciones (Nachdruck)
 Bauer, Hans Ludwig et al. (1987): Atmosphärische Hörscenen für Anfänger. Arbeitsbuch. Inter Naciones (Nachdruck)
 Bauer, Hans Ludwig (1992): Hören ohne Angst. Atmosphärische Hörscenen und Hörbriefe. In: Fremdsprache Deutsch. Zeitschrift für die Praxis des Deutschunterrichts. 7. Hörverstehen. November 1992 Klett Edition Deutsch, München 24-27.
 Dahlhaus, Barbara (1994): Fertigkeit Hören. Langenscheidt München
 Hirschfeld, Ursula (2002): Phonetik in Deutsch als Fremdsprache. Situation-Arbeits- und Forschungsschwerpunkte-Perspektiven. In: Deutsch als Fremdsprache. Heft 2. 39. Jahrgang. Langenscheidt München / Berlin, 82-87.
 Hoshii, Makiko (2001): Wortakzent im Japanischen und im Deutschen. Erwerbsprobleme bei japanischen Deutschlernern. In: Deutsch als Fremdsprache Heft 1. 38. Jahrgang. Langenscheidt München / Berlin 37-41.
 Solmecke, Gerd (1992): Ohne Hören kein Sprechen. Bedeutung und Entwicklung des Hörverstehens im Deutschunterricht. In: Fremdsprache Deutsch. Zeitschrift für die Praxis des Deutschunterrichts. 7. Hörverstehen. November 1992 Klett Edition Deutsch. München 4-11.

《付録》 聴き取り練習の内容と順序 (Bauer: 1987 S. 11–13 より)

Durchgang	Aufgabe, Tätigkeit	direktes Lernziel
K Kontrollfragen zum Inhalt		
1. Orientierung	Fragen lesen und verstehen auf Geräusche und Vorspann achten Überschriften, Titel zu den einzelnen Teilen der Szenen finden darüber sprechen	die Situation bzw. den Situationsrahmen verstehen und einen Erwartungsrahmen den verbalen Dialog bekommen;
2. Globales Verstehen	Fragen lesen und verstehen Hören und gleichzeitig Notizen machen darüber sprechen	den globalen Inhalt verstehen
3. Detailverstehen	Fragen lesen und verstehen Hören und gleichzeitig Notizen machen darüber sprechen	Detailinformation verstehen
I Interpretationsfragen	Fragen lesen und verstehen Hören und anschließend Notizen machen	Gesamtdialog interpretieren, d.h. Sprecher und Stimmung im Dialog

Durchgang	Aufgabe,Tätigkeit	direktes Lernziel
		charakterisieren
	darüber sprechen	Eindrücke zu Situation und Personen wiedergeben Stellung in bezug auf eigene Erfahrung nehmen
L Information zur Landeskunde	Texte lesen	Kurze Lesetexte verstehen
	darüber sprechen	sich informieren und darüber reden
T Fragen zum genauen Text	Text lesen und wenn möglich Lücken ergänzen	Mitverstehen, Vorver- stehen, Antizipation: Lücken ergänzen durch
	Text und Tonband hören und Lösungen überprüfen bzw. rest- liche Lücken ergänzen	inhaltliches, grammatisch strukturelles Kombinieren Erinnerung, Wiederholung: den genauen Wortlaut heraus hören mit Hilfe des Tonbands Lücken ergänzen neue Ausdrücke erfassen
A Wichtige Ausdrücke	lesen und lernen	sich die wichtigen Ausdrücke bewußt

		machen und merken
Ü Übung zu den Ausdrücken	schriftl. Transfer- Übungen	sich an eigene Situationen erinnern
Q Quiz	Sätze aus dem Kontext den einzelnen Hörse- zen zuordnen	Behalten: Wichtige Ausdrücke behalten, indem sie dem Kontext, der Szene, in der sie vorkamen, zugeordnet werden: Wer sagt was? In welcher Situation? In welcher Szene?
FG Formalgramma- tische Übungen	Lücken ergänzen	Formal-Grammatik, Lexik, Idiomatik wieder- holen, festigen.

durchgängiges, indirektes Lernziel:
(gilt für alle Durchgänge)

Fragen besprechen
Antworten besprechen
sich äußern
auf die Gestaltung des Unterrichts
Einfluß nehmen:
Lehrer zu Lehrschritten auffordern
Bitte spielen Sie den Dialog noch einmal!
Ich konnte das und das nicht verstehen,
raushören etc.

Fertigkeit Hören und Sprechen im Deutschunterricht

Yoshitaka KAKINUMA

Am Ende des 19. Jahrhunderts hat W. Viëtor die damalige Unterrichtsmethodik der Fremdsprachen in Deutschland stark kritisiert und die direkte Methode vorgeschlagen. Während die damalige Grammatische-Übersetzungsmethode auf die geschriebene Sprache den Schwerpunkt gelegt hatte, benutzte man anschließend auch die Unterrichtsmaterialien aus der gesprochenen Sprache und machte Phonetikunterricht. Danach wurde über verschiedene methodische Probleme im Fremdsprachenunterricht diskutiert.

In dieser Arbeit wird die jetzige Lage des Phonetikunterrichts in Japan kurz kritisiert und es wird dann nach einem Übungsmodell für Hörübungen im Englischunterricht eine Übungstypologie im Deutschunterricht vorgeschlagen. Die Einübung des Hörverstehens und der Aussprache betrifft nicht nur die Phonetik, sondern auch sehr stark andere Bereiche wie Lexik und Grammatik.